

樺太アイノに關する人類學的探究紀行(下)

清 野 謙 次

第二 樺太島榮濱郡榮濱村魯禮に於ける

金屬時代アイノの研究

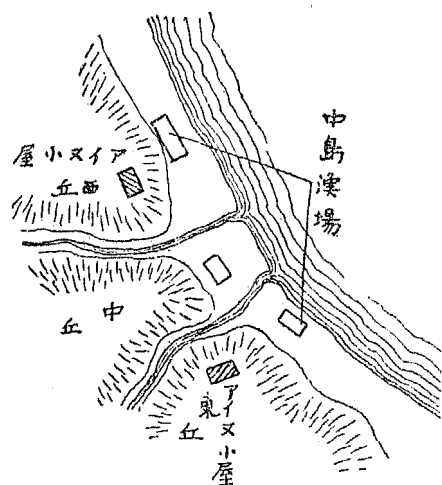
榮濱で白濱アイノ學校の先生伊藤氏に面談してアイノの葬法を聞いた時アイノは死者の事を口にするでも厭がるので能く分らないがど前置しながら話された處によるとアイノが死ぬと人々が集まつて悲み死者の爲に木棺を造る、死者には盛裝させて男子にはケリを足にはかせて生前愛用した品及木製の模造品を造つて一所に埋める棺には底が無い、草で覆つた蓆を敷て上に臥かせる、顔は一尺四角位の絹切れで覆ふ、老年のアイノは自分で蓆を編んで死んだら葬つてもらう爲めだと云つて轉宅の時には絹切れと共に大切に保存すると云ふ話であつた。僕等が魯禮を發掘して見ると氏の話は毫も誤無かつた。

樺太アイノに關する人類學的探究紀行

生存アイノの間に古器物を求むることは不可能である。何となれば彼等が貴重な寶物と考へるものは死んだ時に埋葬してしまうからである。然し彼等の寶物なるものは彼等に取ては貴重品であるが日本人の眼からは下らないものである。多くは日本製の安價な漆器(椀膳等)で日本刀の如きも下らない仕人物たるに過ぎぬ。利益に拔目無い商人が勿體ぶつて無智なアイノに高貴な皮類などと交換した屈辱的のものであるつまり副葬品は彼等の手工品を除外すれば古道具屋のがらくたを以て滿て居るのだ。唯副葬品には木製品が多い爲めに木棺の既に朽ちた場合には副葬品の大部分は朽ち去て居る。唯僕等は棺の朽ちざるもの約十三例あつた爲め副葬品の配置整然たるを見る機會が少なく無かつた。亡

び行くアイノの爲めに之れを記載するのは他の必要となるだらう。

墓地は住所と餘り遠く無い所に在る。出たために埋めずに墓は幾分近接して居るのを常とする。魯禮の見取圖を示すと地形上榮濱の方から行て第一臺地第二臺地第三臺地と分れるが第二臺地に人骨が最も多く埋められて居つた。



孰れも高臺上で海を見晴らす景色の佳い場所だが何時でもさう云ふ所にある譯では無い。

第二高地では一番高い所には木棺の朽ちた割合に古い墓がある。東の少し下つた方に新しいのがある。古いのは各少列をして居る傾向はあるが規則正しくは無い。新らしいものになるに従つて規則正しく約五尺位の間隔で横へ連なつた列を成して居り、此列が向ひあつて行を成して居る。棺の腐ちざるものは棺上の土が少し高まつて居るが棺が朽ちると土砂が棺中に落込む爲め長方形の凹みを生ずる。古い棺は極く浅く土中に埋められて居たものらしい。棺蓋が殆んど地上に露出する位の程度である。従て長方形の凹みを掘ると直ちに腐朽した木棺蓋片に達し直下に人骨が現はれる。然し棺蓋の腐朽して居らぬ位の新しいものになると地表下二尺乃至三尺掘らないと棺蓋に達せぬ。之れは浅く埋めると後人が發掘して副葬品、殊に貴重な毛皮を盗み取られるのを用心したものと思はれる。

樺太アイノは古い時代には墓標が無いと云はれて居る。之れは實際らしい。アイノは日本人を真似様と計りして居るから墓標を造るのも日

本人の卒塔婆に眞似たものだらう。魯禮の墓標は七個あつた。何れも細長い扁平な木で中央より少し上部に穴がある。此穴の中には通常二本の棒を通じて立て掛けて居る。棒の一は尖端ある銛の横造品で他の一は同大の細長い丸棒である。墓標は棺の頭部、棺から三四尺離れた處に立ててある。そして棺に向つた方にはアイノ特有の模様彫刻があるが七枚共總て異つた模様である。此墓標は大人にのみある。相當に功勞のあつた者で無いと樹てられぬらしく思はれる。

墓標の形は西海岸と東海岸とは異なつて居ると云ふ。内淵の新墓地では枝の出た丸木の彫刻ある墓標が一つあつた。此形狀のものは東海岸では例外に屬する。又内淵の新墓地にては法名を記した純日本式の墓標をも見た事は日誌に記した通りである。アイノの習俗が日に月に移り變りつゝある證據だ。

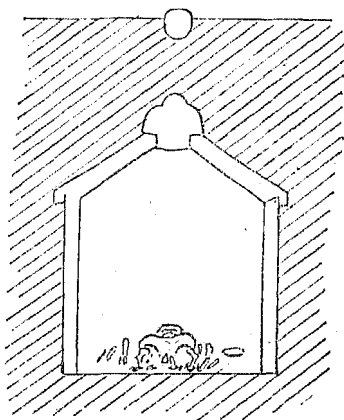
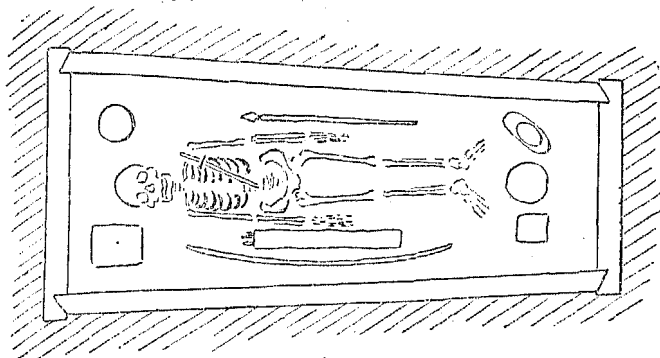
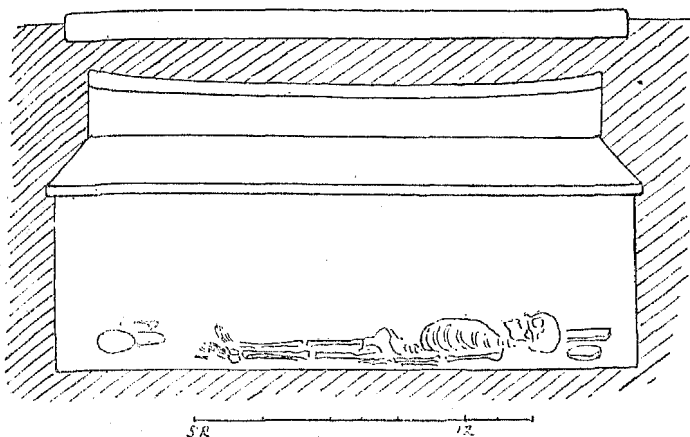
木棺は疑も無く家屋を模したものである大略二種に分てるが一は略式らしい。甲は正式の精巧なもので圖で明らかなる如く屋根に傾斜があ

る。全部三寸位の厚さの頑丈な板で造られ板と板との間は彫り込んで喰ひ込みになつて居るから木板の腐朽せざる限り土砂は浸入しない。棺の最上部に棟木に相當する長材がある。第二十號には此材木にすかし彫刻があつた。又本例には屋根の覆土の四隅に可成り精巧な彫刻のある板を千木に似た位置で地上に突立てゝあつた然し此四本の木片は棺の屋根板には取付けられて居ら無い。斯かる例は稀れで棟木には大して彫刻が無いのが多い。棟木を取り除くと屋根は左右各一枚の大板から出來て居る。時によると此屋根板上に二本宛の壓へ棒があつて直ちに開か無い様にしてある事もある。棟木の上端が地上に露出せしめてある例もある。斯かる場合には棺は浅いが、深く棺を理めたものには棺木の上之れと平行して一本の丸太が横へてある。蓋を開いて上から見ると棺は正方形で無い。頭部は廣く脚部は狭い。

乙種の棺は平屋根である。棟木は扁平な板から出來て居て之れに二枚の壓へ板が横へられ、

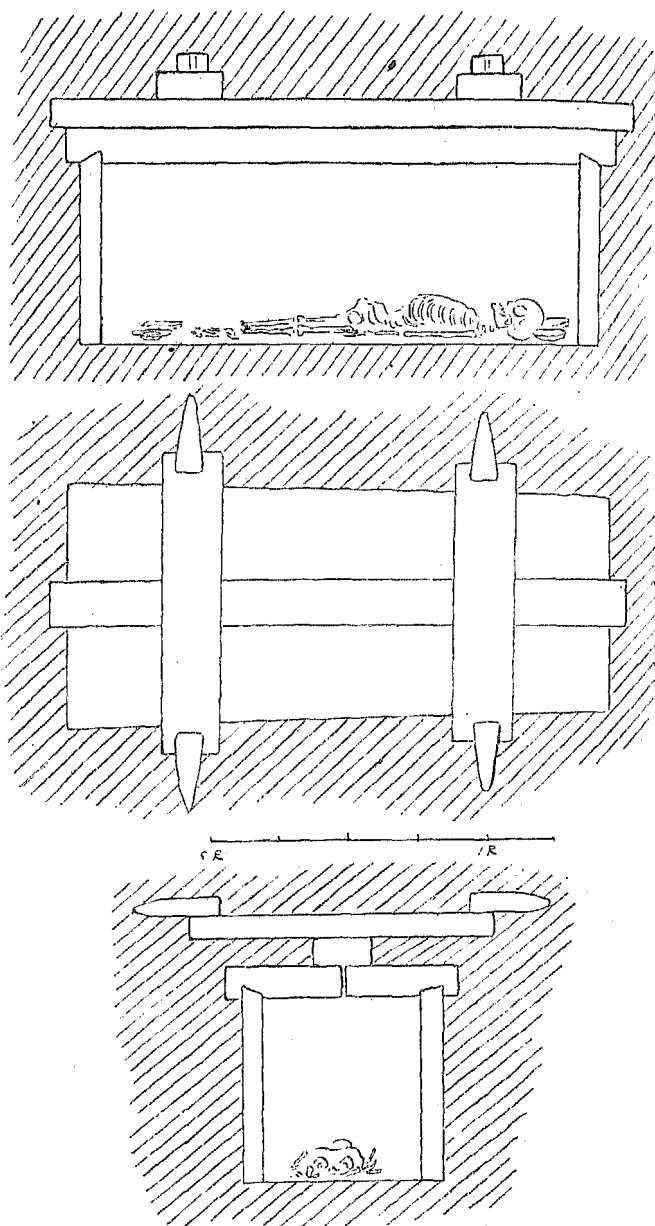
此板の兩端に更に棒が打込まれて居る。何れにしても全部組み合せて釘は使用して無い。而し

外面には簡單な彫刻のある事がある。棺の長さ



は兩種共七八尺で高さは二尺から二尺五寸である。棺に底は無いが草で編まれたよしづ様の蓆

が布かれて其上に死體が安置されて居る。魯禮の死體は必ず頭を西にして居る。而して



仰向けに氣を付けの姿勢で横はつてゐる 副葬品の置き方には多少規則がある様である。

頭の左右には漆塗の盆と椀がある。日本製の安物である。盆は多くは頭の右横にある。角形の事もあるし丸形の事もある。平たく置かれて居る事もあるし棺壁に立て掛けてある事もある通常一枚である。椀は盆と反對の位置即頭の左横にある事が多い。一個の事があるし多い時には三個に及ぶ。黒や青や赤や一定せぬ 糸底の高い形のものもある。盆椀の兩者が頭、一側のみに置かれて居る事もある。死體の顔と頭とは朽ちた絹切れで覆はれて居る。頸の近邊に硝子製の南京玉が多い。殆んど各例に見る。頸飾にしたものだらうが毛髪の多少残つた例では頭髮の所にもあつた。耳飾は時々發見する。銅環又は鍍銀銅環でガラス玉時としては翡翠の入たものもある。胴及兩腕は絹らしい衣服に包まれて居る事もあるし毛皮らしい事もあるが腐朽して宜く分らぬ。兩腕の外側に沿ふて長い木製品がある。白木の弓、箠に入つた矢、大きな鐵製の

鈎針、やす等は屢左右側の何れかに分たれて並んで居る。日本製の金屬製煙管は殆んど各例にあるが時どすると石製のものがある。アイノの自製の者らしい。又煙管は時として彫刻あるしやくし形の木器中に入つられて居る事がある。煙管は腕の外側にある事もあるし腹の上と思はれる位置に在る事もある。

帶をしめて居ることが少なくない。帶は革製で之れに銅の圓板様の金具が附いて居る。而して腰の後の邊に帶にマキリの様な小刀が附て居る。マキリも殆んど常に存在する。木製彫刻ある鞘のものど木皮鞘のものど二種並んで右か左の腰の邊にある事が多い。

日本刀も殆んど總ての例に存する。櫛を頭位にして腕の外側にある事もあるが最も多くの場合左肩上に櫛を置き胸上を右下斜に切先きが右腹上に達して居る。刀を抜きはなつて居る場合が少なく無い。此場合鞘は身に平行して存する事もあるが屢左腕左側に弓矢と共に鞘丈け置かれて居る。刀を抜きはなして無い場合には必ず

鯉口を一ニ寸拔て居る。

足端近くには殆んど常に木皮製曲げ物がある而して又アイノ自製の彫刻ある木盆或は魚を盛て食する時に使ふ兩側の突き出た木製の椀がある。此處から木製の匕や木釵や杵に似た木製模造品や其他不明のアイノの製木器が出る事がある一二例であるが腹部の上に將棋のこまの様に切た粗末な扁平な長さ三寸許の木板が乗て居た何であるか分ら無い。

總て此等を安置した後死體の上一面に蓆を覆て居る。此蓆は敷物の蓆と同質の編み物である尙記述を要するのは大後頭孔を切開いて大きくした事實である。コルベルニツキ氏及ウキルヒヨウ氏がアイノの頭蓋で注目した以來小金井博士の注意を牽て居る事實であるが僕の發掘例中少くとも五六例はある。即頭蓋底の大後頭孔の後右の部分或は後左の部分に於て大後頭孔と略同大の骨質が切り取られて居る爲めに大後頭孔は略二倍大となつて居る。小金井氏の云はるゝ如く死後何かの迷信によつて死者の腦髓をか

き出して埋葬したものであらうが、斯かる死體でも頭蓋は全身の現位置に存在して居る事を僕等は知り得た。死體から頭を切り取て此手術を行つたもので無く小金井氏推測の如く後方から頭蓋を切り離し頸部前面の軟部は其儘として此手術を行つたものらしい。

更らに後述ススヤ貝塚發掘の石器時代樺太アイノ人骨を検すると五例中の三例は此手術が施されて居る。然のみならず石器時代人骨では切り取り方が更に強くて大後頭骨の左右後の三側に互り居る爲め大後頭骨は三倍大となつて居る此例でも頭蓋は胴に付いて居た位置に發見せられた。其れだから大後頭孔擴大手術は樺太アイノの古俗であつて石器時代には金屬時代よりも盛んに行はれたものである。

嘗に其れ丈けで無い。石器時代人骨の第八號骨には後頭骨に切り込みがあるのみならず下顎骨の兩側枝部の後縁と下顎體部の下縁に互つて骨質に切り減らされて居る。此切り跡は鈍器を鋸の様に骨にあてゝけつゝた様な痕跡である。

類似は小金井氏の金屬時代北海道アイノ人骨にも一例記されて居る。

小金井氏は此手術は日本人の迷信に基づくもので日本人の所業で無いかと疑つて居られる。即氏の發掘例では斯かる死體によ埋葬後攪亂した跡があるし、人腦が微毒に對して醫藥として使用出來ると云ふ迷信は日本に存在するからである云ふ話である。

然し上記の結果で見ると人腦除去例は金屬時代よりも石器時代に多いのである。樺太の石器時代は本文記述した如く寛永以後且ガラス瓶使用の少し以前迄續いたと云ひながら、日本人に接觸すること多い金屬時代に此風習が反て少なくなつて居るのは變である。且又ローレの墳墓では木棺の合せ目は確實に封鎖されて死體を覆て居る蓆やら顔を覆て居る絹布が殆んど朽ては居るが少しも動いて居らぬに拘らず大後頭孔の擴大されたものがあるのを以て見ると、此手術はやはりアイノ自身が行つたものと見るのが至當である。唯此迷信がアイノ自身に發して居る

ものか或は日本人の迷信がアイノに傳はつたものであるか知り難い。

然し乍ら今日樺太アイノに最も多い病氣は結核症と微毒とであつて。彼等は此兩種疾病の爲めに殆んど絶滅に瀕して居る。人腦が微毒に利くと云ふ迷信がよし日本人に端を發したとしてもアイノ間に行はれるに至つた事は無理もないのである。

穴の開いた一文錢も魯禮の副葬品中に發見せられたが適用貨として無く裝飾用らしい。清代支那錢が多いらしいが精査した後で無いと斷言出來ない。小兒の副葬品には繪本の斷片もあった。又少數の大人例では頭の上の所に四脚ある漆塗膳が置かれて居た。

前に少し記載したが第三丘の第四十九號例では内耳式土器の略完全なものが出た。人骨は腐朽して居るが足部右側に相當する。他に一物も發見しなかつた。之れと平行して略三尺を距つる第四十八號例では拔刀八本出た。之れ亦人骨は朽て居る。兩側の年代は非常に距つて居ると

は思はれ無い。従て内耳式土器は金屬期後來の頃迄使用せられて居たもので製作の拙劣なのは原始的の古式で無い。土器廢止に近づいた時に生じた技術の墮落に因すと思考すべきであらう尙之れに參考となる事は第二丘に於て墓の覆土を發掘する時土中に土器の小片が少く無い。石鎗もあつた。土器片の製作はススヤ貝塚と同種類のものである。従て魯禮アイノは石器時代には鈴谷アイノと同様な土器石器を使って居たのが其末期に内耳式土器をも使用したと云へるのである。

墓の上には木標の外死者の生前使用した犬櫛(ノソ)と之に使用する梶棒とが置かれてある事がある。第二十七號と第二十九號にあつた。第二十九號のノソは非常に完全なもので棺の直上の覆土上に棺と同方向に置かれて居た。尙此ノソの上には一足のストウ(カンデキの類)が置かれて居た。但後者は小形の木製模型であつて實物では無い。

要するにアイノは生前に於ける如く死體に美

衣と日用品を給し家屋形の棺に入れて土に歸らしめた。之日本の原史時代の習俗に似て居るが世界一般に互れる古俗である。今や青年アイノは純日本式の教育を受けつゝあるのだから二十年の後には埋葬法も非常に變化するであらう。内淵に佛式のアイノ墓が在るのは其證である。今日に於て僕等が之を調査したのは決して早きに失しはしまいと思ふ。副葬品は分つと二になる。第一はアイノ固有の品で第二は外國品である。銅製金具の附いた革帶は露國輸入品である。漆器と刀とは日本製で、耳飾首飾等のガラス玉は支那製である。煙管の金屬製のものは大部分日本製だが石製品は支那製だらう。近代に於ける樺太アイノの文化は要するに此三方面から輸入せられたものと考へて差支へあるまい。

第三 樺太島大泊郡千歲村北貝塚鈴谷

貝塚の石器時代アイノの研究

貝塚村には貝塚が三箇所ある。第一はソロヨフカ貝塚で、第二はススヤ貝塚である。日軍占領當時から此地に居住して居る渡邊祐作氏の口

話に據れば此貝塚の發見者は飯島(魁)博士で、同博士が之を坪井博士に報せられたものらしい然し正式の發掘報告者は坪井氏及同氏に同伴して來た石田收藏、野中完一の兩氏である。東京人類學會雜誌には坪井氏及石田氏の報告があつて坪井氏は管狀鳥骨に珍奇な彫刻ある例を報告して居られる。其後鳥居博士も此貝塚を訪れた事があつたらしい。

ソロヨフカ貝塚は停車場の南に在る。貝塚停車場から三澤停車場の方へ線路傳ひに歩むこと數町東から西に突出した丘の麓に在る。第四紀層の砂地で浪打際に近い貝塚の大部分は耕地になつて居るが貝殻の分量は多く無い。近邊の畑地には貝殻は散布して居らぬが石器は拾う事が出来る。もう何處を發掘し様と云ふ見込も立たぬ所である。

貝塚の上の丘陵の頂に近い畑の斜面にも貝層がある。ソロヨフカから二町程距つて居る。此貝塚は今日迄報告せられ無いもので高い所に在るが貝殻もソロヨフカと同様に『かき』『ばか』

『あきり』が主なるものである。住居の關係上高い所に出來た丈でソロヨフカ貝塚と略同時代のものだ。丘上の住民が貝殻を丘の傾斜面に棄てたに過ぎまい。土器片と石器片が出るが遺物は貧弱である。

ソロヨフカ及此新發見の貝塚の遺物は大體に於てススヤ貝塚に似て居る。三貝塚共に同時代に出來たものらしいからススヤ貝塚を根本的に研究すれば充分である。

ススヤ貝塚は貝填驛から北の方中里驛の方向に線路を傳て進み、熊の澤養狐場の所から西へ曲る。留多加の方へ行く舊道である。密林の中を行く事數町にして雜草の生ひ茂つて居る地に達するススヤ河口であつて東から西に突出せる陸舌である。道路は南から北一此貝塚の略中央部を兩斷して居る。

貝塚上に立つて西を眺めると亞庭灣の水光天に接する。北には西能登呂半島の山が遠く連なりススヤ河が近く流れる。魚貝に富み風光の佳い地である。

貝塚の地積は諸所貝層の斷續して居る爲め及雜草の繁茂して居る爲に明らからず無いが一町四方位には違するだらう。地形上道路の兩側を發掘するのが良いと思つたので仕事の前半は道から東即海に近い方を百坪以上發掘した。内地では西即海に近い方を百坪以上發掘した。内地では發掘となる地主がごうの發掘後の地均しがかうのと頗る面倒だが樺太では何處をどう掘り放しにしたつて故障を申込む者も無い。

貝層は所によりては一層で所によりては二層より成る層位の最も宜く整つて居る貝塚の中心部に就て述べると雜草の根の下に直ぐに第一貝層が現はれる。第一貝層は七八寸の厚さがある。其次に赤い焼灰を混じた第一赤土層が四五寸ある。其次に五寸内外の第一黒土層、其下に七八寸の第二貝層があつて其下に五寸内外の第二黒土層がある。其下には一寸位の焼灰又は木炭より成る層、其下に焼灰を交ふる第二赤色土層が四五寸あつて。最下に三寸位の第三黒色土層がある其下は山土であつて遺物は出さぬ。以上の

各層は貝塚の部分によつて厚薄がある。第一貝層の無い事がある、第一赤土層及第一黒土層の區別判然たらずして唯一層の赤黒土層を成せる所がある。第二貝層以下の諸層も往々判然たる區別が無い。

第一貝層の上半部からは獸骨は出すが石器及土器片を出さ無い。唯稀れに硝子瓶の破片が出て来る。露西亞から輸入されたオツカ酒瓶らしく思はれる。第一貝層の下部から第一赤土層、第一黒土層に互つて土器片及石器に富む。又往々骨器殊に鯨骨製器具が出る。後者の穴の穿ち方は甚だ銳利で金屬器を使つたものなる事を疑はしめる場合が少なくない。第二貝層も遺物に富む然し此層から出る鯨骨器の切り目は鈍器が使用せられた跡がある。第二貝層以下の諸層は遺物に乏しいが石器土器片を往々出す。以上に據て明らかな通りスサヤ貝塚の集積には數百年を費したもののらしい。其初は純然たる石器時代だが漸次に鐵器時代に移行して硝子瓶の輸入される時代、恐らく明治初年迄續いたものである。

貝層を形成する貝の種類は多く無い。大きな『かき』『ばか』『あさり』貝殻が多い。二三の巻貝も少量ある。第一貝層及第二貝層共に大した差は無い。此等貝殻は今日も尙ススヤ河口、大泊灣で盛んに捕獲せられる所のものである。唯大泊灣に多い『はたて』貝が貝層中に極めて少ないのは捕獲困難に因するものと思はれる。

動物骨は貝層内に多いが貝層以外にも在る。鳥骨、魚骨の外に獸骨がある。熊の下顎骨、鯨骨、海獸の骨は往々出て来る。鹿骨は案外少ない。犬の頭骨と四肢骨は多い。

土器は人骨に副葬せられたものの一個の外は破片のみである。金形は上部の廣い壺形のもの大部分を占て居る。底は全部平底で圓形のものが多いが楕圓形のものもある。絞様の無いものが多い。火力不充分にして著しく破碎し易い。縁部は平がなものの外、小なる波狀高低を附したものの又は刻みを附けたものがある。紋様は壓し附け紋様で簡單な形状のものが多く、日誌部に記した楠溪町の土器よりも更に簡單なものが多

い様である。眞岡邊に出ると云ふ縄紋土器及内耳式土鍋は遂にススヤ貝塚から出なかつた様だ。石器は二百個以上出たが石斧には磨製石斧が多い。打製石斧も少數ある。短冊形のものである。打製石斧の刀部に近い所が磨製せられたものがある。全部蛤刃である砥石の破片も多い。石鏃、石鎗類の小形打製石器は種々の石質から造られて種々の形狀を呈して居る。製作は拙で無い。錘石も少數あるが溝を附したものが多く、樺太の溪谷には石炭の露頭が多いので河石に交つて丸くされた石炭塊がある。貝層内からも他の石器材料に交つて此石炭塊が出て来る。然し石炭で造つた品は後述第一號人骨の飾玉丈けで表面を磨いて細長くし、一端に近く穴を穿つて居る。然し石炭を燃料として使用する知識は此地の石器時代人民には無かつたと思はれる。木炭の残りは出るが石炭の燃え残りは全然見無い。

骨器の大部分は鯨製のものである。骨刀なども見る可き長大なものや骨斧と思はれる形のもの

がある。骨製楔と思はれる大小各種の品が出た。骨鉋に屬するものには形狀の珍奇なものがある。而して其内の或るものは北海道アイノの土俗品と似て居る。全然用途の不明な有孔鯨骨板もある。骨器は變化に富で興味のあるものである。

唯坪井氏等の發見せられた彫刻ある鳥骨管が出て來なかつたのは残念だ。具器は『ばか』貝の一片の端に穴を穿つた者一品出たのみである。

人骨は總計九例ある。孰れも海岸に遠い方から出た。即貝塚の中心部で平坦な場所から出た層の深は種々で第二貝層より下に在つたものがある。斯る場合には人骨上部の貝層は毫も攪亂せられて居らぬ。即貝層積成後に埋められたもので無い。魯禮の金屬時代アイノ骨が必ず頭を西にして居るに拘らず、ススヤ貝塚の古骨は頭位が種々で東が多いのは著明なる差である。個々の例に就て記すると左の通りである。

第一號人骨。地下三尺第二貝層の下に在り。頭を東とし仰臥屈葬なれど骨質の大部分腐朽せる爲詳細の點を検し得ず。屍の胸部

に黒色石炭製有孔飾玉一個出づ。

第二號人骨。地下二尺。第二貝層中に在り氣を附けの姿勢にて仰臥伸展、頭は北東に在り。

第三號人骨。地下一尺、第一貝層の下部に在り。大木の生じ居りし爲破壞せらるゝ事強し。頭は東北にあり。

第四號人骨。完全。地下二尺五寸。第一貝層の下部より第二貝層下の地層に互りて存す。仰臥屈葬、立て膝なり。頭は西南に在り。胸上の中央部に鉢形完全小土器（徑四寸位のもの）を置く。但口部を下にす。一の中は空虚なれど唯打製石庖丁一個が口部に置かれあり、頭の左横に四角形の盤狀に切れる鯨骨一片あり。

第五號人骨。好奇心に富める人々の小發掘によりて攪亂せられたる部分より出たる人骨片を集成せしもの。

第六號人骨。地下三尺。第二貝層の下に存す。仰臥屈葬なり。頭は東に存す。臀の下に扁平なる石の周圍を打破りて橢圓形板と

せしものを敷く。

第七號及第八號人骨。第八號人骨の直上に第八號人骨あり。採集上兩者の骨を一一區別し難かりしにより合同す。但第八號は骨小にして骨質腐朽に傾けり、成熟女體なるべし。第七號骨は大にして完全、成熟男體なるべし。兩者共仰臥屈葬。女體の胸腹上に男體の背ありて上下に重なり合へり。兩者共頭は東に在り。第七號は第二貝層中地下二尺五寸にあり、第八號は第二貝層下地下三尺にあり。

第九號人骨。大木の爲骨盤以上の部分の破壊甚だし。但下肢は屈せり。

以上各例中頭蓋骨の完全又は大部分存在するもの五例あり、此中三例（第一號、第二號、第七號）は大後頭孔人工的に擴大され二例（第六號、第八號）は此手術を受け居らず。又第二號及第九號の兩例は礫中に包まれて居る。此礫は直徑五六分の海濱の波打際にある様な角の無いものである。人骨の周圍一尺程の間は此礫から

成て居て人骨は此礫中に埋葬されて居る。故意にやつたものに相違無い。

要するにスチャ貝塚人骨は魯禮アイノ人骨と測定を行はずとも非常に似て居るのが明らかだと云へる。魯禮からも鈴谷貝塚と似た土石器を出す事は兩者曾て同一の文化に在た證である時代は魯禮人骨の方が新しいが大後頭孔擴大手術を兩者とも行つたし、又鈴谷貝塚ではアイノ人に取て必要な家畜たる犬を盛んに飼て居た此等の事實は鈴谷貝塚人骨が現代樺太アイノと密接なる關係ある事を立證するものである。

僕等の樺太アイノ骨體の探究は成功を以て終へたと云つて宜しい。何となれば現代樺太アイノを代表す可き金屬器時代樺太アイノ人骨のみならず古い石器時代貝塚人骨をも採集し得て樺太アイノの體質を根本的に探求し得るの材料が集まつたからである。精細な報告を出す迄には多大な時日を要する。暴風で宗谷海峡が渡れない爲に二日間船待つ暇に取敢へず觀察の概要を記した。日誌中の樺太を去た日以後の記事は後日の蛇足に外なら無いのだ。（大正十二年八月五日）